

令和8年度 第1回学校運営協議会 熟議（Aグループ）会議記録【要約版】

日 時： 2026年6月18日（木）

場 所： 北海道真駒内養護学校 会議室

テーマ： 地域資源を生かした「今」の取組、および今後の
地域連携・社会参加の可能性について



1. 学校の現状と「校外活動」における課題

学校側から、パラスポーツ交流や札幌平岸高校との作品・特別授業交流、南の森支援学校との植栽活動（スマイル大作戦）など、現在の地域連携の取組が紹介された。一方で、コロナ禍以降、肢体不自由のある子供たちが街中へ出かける「校外学習」のハードルが高くなっており、バリアフリー対応の最新施設や車椅子での移動に関する情報が不足しているという課題が共有された。

2. 進むバリアフリー化と「お出かけ」の具体的事例

福祉施設を運営するA委員は、家庭でも外出のハードルが高い現状を指摘しつつ、自事業所での成功事例を報告した。

赤れんが周辺：公共施設は手帳提示で減免があり、商業施設「赤れんがテラス」は医療的ケアを落ち着いて行える多目的トイレが充実している。

エスコンフィールド HOKKAIDO：大型貨物用エレベーターの利用を案内され、車椅子20台以上の団体でも一度にスムーズに移動できた。

インフラのアップデート情報を学校と共有できれば、校外活動の選択肢は大きく広がるとした。

3. 「外へ向けた販売会・作品展」の提案と教育的価値

B委員は、学校が情報を持って外に出るだけでなく、子供たちが社会へ出ていく機会として「大通公園などの公共スペースや主要駅での販売会・作品展」を提案した。地域の他校や町内会を巻き込む形にすれば学校の負担も減り、一般の人が障がいのある子供たちと直接触れ合い、理解を深める本質的な機会になる。

現在、高等部では「作業学習」で木工や窯業などの製品を作り「高等部祭」で販売している。

これに対し、B委員とA委員は「小学部・中学部・高等部の一貫した教育ビジョン」の構築を提言した。

役割分担： 高等部がベースを作り、小学部・中学部が「飾りつけ」「イラストや紹介文の作成」「袋詰め・ラベル貼り」などを発達段階や得意な動きに応じて分担する。

教育効果： 学校全体で一つの製品を作り社会へ届けるプロセスを通じ、子供たちに「高等部になったらあの製品を作って販売するんだ」という将来への成長モデル（見通し）を持たせる。また、実際の販売現場は、声かけや会計など社会で必要な「生きた力（決める・見通す・関わる・伝える力）」を学ぶ最高の舞台となる。

4. 地域資源の活用と「キッチンカー」による規制の克服

C委員は、近隣の町内会文化祭（川南会館など）への作品出展の現状や、車椅子でも移動しやすい「自衛隊前駅」周辺の活用、真駒内駅高架下の空きスペースを利用した展示・校外学習の連動案を出した。

また、過去に学校敷地を地域に開放してお祭りを実施した際、飲酒の規制や物品販売の管理負担（利害関係の障壁）により中止となった経緯が話し合われた。これに対しC委員は、近年の高校の学校祭でも主流となっている「キッチンカーの誘致」を提案。金銭授受や保健所の営業許可等の管理を業者に委託できるため、学校側の負担を無くしつつ、子供たちに「自分で選んで買う」という自己決定の機会を提供できる。卒業生が働く福祉事業所のキッチンカーを呼べば、在校生への刺激にもなる。

5. 学生ボランティアの確保と地域活動の現代的復活

ボランティアの受け入れ定着（マッチング）が進まない現状に対し、A委員は、大学の掲示板に紙を貼るだけの従来の方法を見直し、大学の専門ゼミの教授へ直接アプローチしてゼミ単位で学生を巻き込むルートの刷新を提案した。

最後に、かつて20年以上続いていた「精進川の清掃活動」について、春先に車椅子で散歩を兼ねてゴミを拾う形にしたり、秋に落ち葉拾いと焼き芋をセットにしたりするなど、現代の子供たちの実態に合わせて「無理なく楽しく地域交流ができる形」で復活させていく見通しが立ち、駅前展示やキッチンカー、ボランティア確保を組み合わせた一つのパッケージとして全体共有へ移った。